

みんなで考えよう！ 書写指導⑤（毛筆編）

姿勢，筆の持ち方，左利きの児童への指導例

姿勢

よい姿勢の合い言葉

- ・文字を書く前には、「よい姿勢の合い言葉」をクラス全体で唱えることで、定着を図ります。例えば次のように、教科書の合い言葉をアレンジしてもよいでしょう。

【合い言葉の例】「足はペッタン」「背中はピン」「おなかと背中に グーひとつ」
「紙を押さえて筆を立て」「墨をつけたら さあ書こう」

筆の持ち方

筆の持ち方は、親指と人差し指で筆を掴み、中指の第一関節あたりで支える「一本がけ」と、親指と人差し指と中指で筆を掴み、薬指の第一関節あたりで支える「二本がけ」があります。持ちやすいほうで持つように指導します。

【声かけの例】「筆は穂先を左斜め45度にします」

算数で角度の学習を行う前の時期には、

「筆の穂先は折り紙を斜め半分に折った時の向きにします」

とするとわかりやすいでしょう。

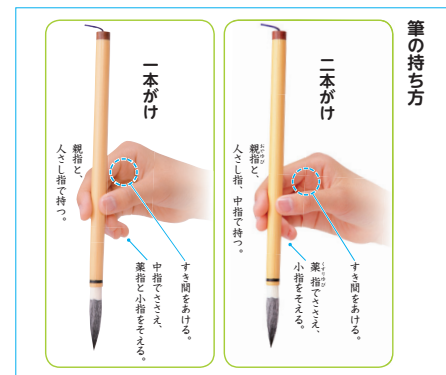


図1 筆の持ち方（PDFがダウンロードできます）

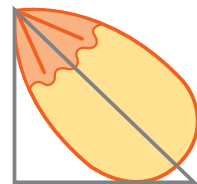


図2 穂先の向き（PDFがダウンロードできます）

左利きの児童への指導例

左で書くか右で書くかという問題は、本来は入学時点で保護者と相談して決めるとよいでしょう。基本的には、毛筆は硬筆の基礎を学ぶものなので、左利きの児童は毛筆も左で書くことになります。しかし、文字が右手で書くのに都合よくできていることと、毛筆の筆使いは左手では書きにくいので、左利きの児童には毛筆を学習するタイミングで声かけをすることも指導方法の一つとして考えられます。新たな用具として使用する筆については右手にした場合でも、普段の硬筆は左手のままです。

【声かけの例】「文字は右で書くのに都合よくできているから、右で書いてみますか？」

① 左手での筆の持ち方の指導例

机の上の用具の配置を右利きの子どもと左右対称にしたうえで(図3)、筆の持ち方を工夫することも考えられます。

【声かけの例】「筆の持ち方を工夫してみようか」

筆は二本がけにし、軸を薬指の第一関節と第二関節の間で押さえます。こうすると、書字の際に自分の手が文字を書くときの邪魔になりません。しかし、握力の弱い児童では、筆が滑ってしまい書きにくくなる可能性もあります。



図4 左利きの持ち方の例
軸を薬指の第一関節と第二関節の間で押さえる。穂先は左斜め45度を保つことができる。ただし、握力の弱い児童には不向き。



図3 右利き用から左右反転させた置き方にする。

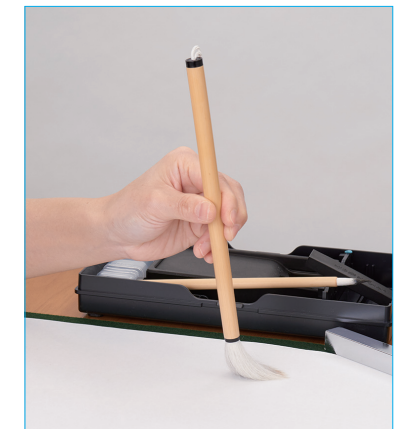


図5 左利きの持ち方で構えたところ。

② 用具を置く位置の工夫

左利きの児童にとって、筆を持つ腕が左肩の前から右肩方向への動きになることが、書きにくさの原因となっています。そこで、次のような方法で書きにくさを解消することも考えられます。

【声かけの例】「道具を置く位置を工夫してみましょうか」

半紙を斜めに置く

- ・図6では半紙を斜めに置き、腕の動きを左斜め上から右斜め下への動きにすることで書きにくさを減少させています。



図6 半紙を斜めに置く。

半紙を左肩の外側に置く

- ・図7では、半紙を身体の外側に出して置き、左腕を左肩の外から左肩の前に動いてくるようにすることで、書きにくさを解消しています。左利きの教員が板書するときは、このような方法で書くことが多いようです。

ただし、この二つの方法は、文字を真正面に正対して見られないという欠点があります。



図7 半紙を左肩の外側に置く。